

# 第51回 全国林業後継者大会 いわて2023

## 記録誌

開催日 令和5年6月3日(土)

会場 盛岡市民文化ホール大ホール



主催 岩手県林業研究グループ連絡協議会、全国林業研究グループ連絡協議会、盛岡市、岩手県  
後援 林野庁、一般社団法人 全国林業改良普及協会、公益社団法人 大日本山林会  
大会運営 第51回全国林業後継者大会岩手県実行委員会



# 目次

● 大会概要	P.1
● 大会プログラム	P.2
● 大会会場紹介	P.3
● オープニング・開会式典	P.4
開会の言葉	P.4
主催者挨拶	
岩手県副知事	P.5
全国林業研究グループ連絡協議会 会長	P.6
歓迎の言葉	
盛岡市長	P.7
来賓祝辞	
林野庁長官	P.8
一般社団法人全国林業改良普及協会 副会長	P.9
● 活動発表	P.10
三田農林株式会社 代表取締役社長 岩手林業株式会社 代表取締役 三田林太郎氏	P.10
釜石地方森林組合 理事兼参事 高橋幸男氏	P.12
横澤林業株式会社 専務取締役 横澤孝志氏	P.14
株式会社柴田産業 代表取締役 柴田君也氏	P.16
いわて林業アカデミー	P.18
・岩手県林業技術センター 首席専門研究員 小澤洋一氏	
・有限会社フォレストサービス 則竹 彩絵氏（第3期修了生）	
● パネルディスカッション	P.20
コーディネーター・パネリスト紹介	P.20
ディスカッション概要	P.21
● 閉会式典	P.34
大会宣言	P.34
次期開催県挨拶・閉会の言葉	P.35
● 大会の様子	P.36
配布物紹介・パネル展示・販売コーナー紹介	P.37

# 大会概要

## 開催目的

この大会は、第73回全国植樹祭関連行事として、全国の林業関係者が一堂に会し、豊かな森林を次世代へ継承するため、林業の担い手が果たす役割について意見を交わすとともに、森林・林業の重要性や林業の魅力を全国に発信することを目的に開催する。

## 大会 テーマ

つなげよう 豊かな<sup>もり</sup>森林を 次世代へ

開催日 令和5年6月3日（土）

開催地 盛岡市 盛岡市民文化ホール大ホール

主催 岩手県林業研究グループ連絡協議会  
全国林業研究グループ連絡協議会  
盛岡市  
岩手県

後援 林野庁  
一般社団法人 全国林業改良普及協会  
公益社団法人 大日本山林会

大会規模 470名（県外150名、県内250名、スタッフ70名）

# 大会プログラム

<b>オープニング</b> 13:00~13:30	<b>盛岡さんさ踊り</b>	
<b>開会式典</b> 13:30~14:00	<p>開会の言葉 第51回全国林業後継者大会岩手県実行委員会会長            主催者挨拶 岩手県副知事            全国林業研究グループ連絡協議会副会長            歓迎の言葉 盛岡市長            来賓祝辞 林野庁長官            一般社団法人全国林業改良普及協会副会長            来賓紹介</p>	<p>齋藤 眞琴            菊池 哲            黒田 仁志            谷藤 裕明            織田 央 様            佐々木宣和 様</p>
<b>活動発表</b> 14:00~14:45	<ul style="list-style-type: none"> <li>●三田農林株式会社 代表取締役社長 岩手林業株式会社 代表取締役</li> <li>●釜石地方森林組合 理事兼参事</li> <li>●横澤林業株式会社専務取締役</li> <li>●株式会社柴田産業代表取締役</li> <li>●いわて林業アカデミー               <ul style="list-style-type: none"> <li>・岩手県林業技術センター 首席専門研究員</li> <li>・有限会社フォレストサービス</li> </ul> </li> </ul>	<p>三田林太郎 氏            高橋 幸男 氏            横澤 孝志 氏            柴田 君也 氏            小澤 洋一 氏            則竹 彩絵 氏            (第3期修了生)</p>
<b>パネル ディスカッション</b> 15:00~16:15	<p><b>テーマ</b>            「次代を担う若者が意欲と希望をもって活躍できる魅力ある林業の確立に向けて」</p> <p>【コーディネーター】            国立大学法人岩手大学農学部教授</p> <p>【パネリスト】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●三田農林株式会社 代表取締役社長 岩手林業株式会社 代表取締役</li> <li>●釜石地方森林組合 理事兼参事</li> <li>●横澤林業株式会社専務取締役</li> <li>●株式会社柴田産業代表取締役</li> <li>●いわて林業アカデミー               <ul style="list-style-type: none"> <li>・岩手県林業技術センター 首席専門研究員</li> <li>・有限会社フォレストサービス</li> </ul> </li> </ul>	<p>山本 信次 氏            三田林太郎 氏            高橋 幸男 氏            横澤 孝志 氏            柴田 君也 氏            小澤 洋一 氏            則竹 彩絵 氏            (第3期修了生)</p>
<b>閉会式典</b> 16:15~16:30	<p>大会宣言 いわて林業アカデミー修了生            ・山中林業            ・有限会社アイシンフォレスト</p> <p>次期開催県挨拶 第52回全国林業後継者大会岡山県実行委員会会長            閉会の言葉 岩手県実行委員会副会長 盛岡市農林部長</p>	<p>山中 崇義 氏            (第2期修了生)            松倉 彩歩 氏            (第4期修了生)            三木 敬臣 氏            北田 雅浩</p>



# 大会会場紹介

## 盛岡市民文化ホール大ホール

〒020-0045 岩手県盛岡市盛岡駅西通2丁目9-1

ミュージカルから大規模コンサートまであらゆる音楽系利用、多目的な利用に対応した盛岡市民文化ホールにおいて、大会を開催いたしました。

本施設には、1500人を収容できる大ホールや、パイプオルガンを接地した小ホールなどが設けられ、盛岡駅と直結しており、全国へ「創造・発信・交流」の輪を広げます。



# オープニング・開会式典



## オープニング「さんさ踊り」

演目：「福呼踊り」、「七夕くずし」、「栄夜差踊り」、  
「十二拍子」

藩政時代より受け継がれてきた「さんさ踊り」の起源は、三ツ石伝説に由来しています。その昔、南部盛岡城下に羅刹という鬼が現れ、悪さをして暴れておりました。困り果てた里人たちは、三ツ石神社の神様に悪鬼の退治を祈願しました。その願いを聞き入れた神様は悪鬼を捉え、二度と悪さをしないよう、誓いの証として境内の大きな三ツ石に鬼の手形を押させました。鬼の退散を喜んだ里びとたちが三ツ石の周りを「サンサ、サンサ」と踊ったのが「さんさ踊り」の始まりだと言われています。また、この鬼が岩に手形を押す故事が、県名の「岩手」の由来だとも言われています。盛岡さんさ踊りは、毎年8月1日から4日まで開催される、勇壮な太鼓の音色と華麗な踊りの群舞が魅力の岩手県を代表する夏祭りです。

## 開会の言葉

第51回全国林業後継者大会  
岩手県実行委員会 会長

齋藤真琴

本日はご多用の中、全国各地より岩手県盛岡市にお越しいただきまして誠にありがとうございます。ただいまより、「つなげよう 豊かな<sup>もり</sup>森林を 次世代へ」をテーマに、「第51回全国林業後継者大会 いわて2023」を開催いたします。





# 主催者挨拶

岩手県副知事  
菊池 哲



皆さんこんにちは。岩手県副知事の菊池です。ま  
ずもって今般の台風大雨被害等について、詳細な状  
況把握はこれからだと思いますが、残念ながらお亡  
くなりになられた方に、心からお悔やみ申し上げま  
す。被災された方々、被災地の皆様、お見舞い申し  
上げます。そして、1日も早い復旧が図られるよう  
お祈り申し上げます。

それでは、「第51回全国林業後継者大会」の開催  
にあたりご挨拶を申し上げます。

本日、織田林野庁長官をはじめご来賓の皆様、ま  
た、県内外から多くの皆様をお迎えし、岩手の詩人・  
宮沢賢治が理想郷として追い求めた「イーハトーブ」、  
ここ岩手県で本大会を開催できますことは誠に喜ば  
しく、心から皆様を歓迎申し上げます。

また、従前の大会規模と同様の形でこうして本大  
会を開催できますことを大変嬉しく思っております。

東日本大震災津波から12年が経過いたしました。  
岩手県では震災からの復興にあたり、国内外の皆様  
から多くのご支援をいただくとともに、県民一丸と  
なって復興に取り組んでまいりました。これまでの  
ご支援に、心から感謝申し上げます。

さて、岩手県は、県土の約8割を森林が占める、  
北海道に次ぐ森林面積を有する森林県です。本県の  
豊かな森林から生まれる木材、高品質な木炭や生漆  
をはじめとした特産林産物、加えて、水源のかん養  
など多様で豊かな森林の恵みは、岩手県の世界遺産  
であります「平泉」「橋野鉄鉾山」「御所野遺跡」を

はじめとした様々な歴史文化を育み、県民の暮らし  
を支えてまいりました。

こうした豊かな森林とその恵みを次世代に確実に  
つなげていくため、本県では市町村や関係団体など  
と連携しながら、「植える・育てる・使う、そして  
植える」という森林資源の循環利用など、持続可能  
な林業の実現に向けた取り組みを進めているととも  
に、「いわて林業アカデミー」の開講など、林業の  
担い手の確保・育成に積極的に取り組んでいるとこ  
ろです。

本大会では、「つなげよう 豊かな森林を 次世代  
へ」をテーマに、全国の林業関係者が一堂に会し、  
次代を担う若者が意欲と希望を持って活躍できる魅  
力ある林業の確立に向け、林業の担い手が果たす役  
割などについて意見を交わすとともに、森林・林業  
の重要性やその魅力を全国に発信することとしてお  
ります。

本大会を契機として、全国各地で林業の担い手の  
確保・育成が図られ、将来にわたり循環型林業が実  
現していくことを願っております。

結びに、本大会の開催にあたり、多大なるご尽力  
を賜りました。盛岡市をはじめ関係の皆様へ心から  
感謝申し上げますとともに、本大会の成功にご出席  
の皆様のご活躍を祈念申し上げ、挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお  
願いいたします。

# 主催者挨拶

全国林業研究グループ連絡協議会  
副会長  
黒田仁志



We love forest.

皆様こんにちは。全林研副会長の黒田でございます。ただいまアナウンスがあった通り、本来ですと齋藤正会長がこの場において皆様方にご挨拶申し上げるべきところですが、急遽体調を崩されまして出席することが叶いませんでした。代わりまして、力不足ではございますが主催者の1人としてご挨拶をさせていただきたいと思っております。

それでは、齋藤会長のご挨拶をお預かりしておりますので、代読させていただきます。

『本日は、ここ岩手県盛岡市において、「つなげよう豊かな森林を次世代へ」をテーマに、「第51回全国林業後継者大会 いわて2023」を開催いたしましたところ、情勢の大変厳しい中、全国より多くの仲間たちにお集まりいただき開催できましたことを深く感謝申し上げます。また、公務ご多忙の中、林野庁長官・織田央様、大日本山林会会長・永田信様、全国林業改良普及協会副会長・佐々木宣和様をはじめ、多くのご来賓の皆様方にご臨席をいただきまして誠にありがとうございます。

皆様方には、日頃より我々林研グループの活動に対し、多大なるご支援とご協力、ご助言を賜っておりますことを心より感謝申し上げます。そして、今大会をご準備いただきました実行委員会の皆様方、岩手県様、盛岡市様、そして多くの仲間へ深く感謝申し上げます、ありがとうございます。

さて、今大会は51回目を数え、昭和49年に滝沢村で行われました第3回大会より、49年ぶり岩手県に戻ってまいりました。その間にこの大会は、多くの歴史と実績を積み重ねてまいりました。時代が変わっても、人づくりを通じて林業の発展を追求し、地域の活性化を目指す大会精神は今日も受け継がれております。今後も、次の50年を目指し、次世代への架け橋として継承させ、多様な人材を頼もしい林業の後継者として育て定着させていきたいと考えております。

現在、私たちを取り巻く環境はコロナ禍の取り扱いが緩和され、本格的に経済の巻き返しを図らなければならないときです。同時に、世界的な情勢が変化し続けております。SDGsやカーボンニュートラルなどという考え方が普及して、私たち林業をはじめとした一次産業は大きく見直されてきており、今後期待される産業として立ち位置を変えつつあります。さらに、花粉症対策などにより、森林に対する国民の関心は大いに高まっております。今こそ我々が一丸となって林業の再生をするときであり、同時に世界規模での難関を乗り越えていかなければならないと思っております。

本日は、「つなげよう豊かな森林を次世代へ」をテーマに、全国の仲間と情報交換し、議論を重ね、全国に波及させることにより林業活性化を加速させ、更なる森林整備と国民の期待する強靱な国土づくりと、森と人との共生、安定的な木材生産、中山間地域の振興に結び付けていきたいと思っております。』

と、会長が書いています。

非常に関心は高まっている中ですが、我々を取り巻く状況、ウッドショックの反動と言われる状況で、今、木材価格がまた信じられないくらい下がっています。どんなに美しい言葉を連ねても、経済的に潤いがなければ、我々の産業に後継者が果たして育つものかということもあります。我々林研グループも業界の団体の一つとして、こういった問題にもしっかりと立ち向かい、ちゃんと山元にお金が返ってくるようなシステムを作るための活動もしっかり続けてまいりますので、どうぞご指導、ご鞭撻お願いいたします。

結びになりますが、本日のご盛会と、国・都道府県・関係各位の更なるご指導、ご鞭撻をお願いし、ご臨席の皆様のご健勝、さらに世界平和のいち早い実現を心より祈念申し上げ挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。



## 歓迎の言葉

盛岡市長

谷藤裕明



皆さんこんにちは。開催地、盛岡市の市長を務めております谷藤でございます。

「第51回全国林業後継者大会 いわて2023」の開催にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。

本日は織田林野庁長官をはじめ、ご来賓の方々、そして会場には県内および全国各地から多くの皆様をお迎えし、盛岡市で本大会を開催できますことは、誠に喜ばしく心から歓迎申し上げます。

本市は、市の面積の約7割が森林でありますことから、水源かん養と土砂災害防止、木材供給といった多くの恩恵を受けており、中でも清らかな川と緑豊かな景観は、本市にとって大きな財産と言えます。

このような森林を、健全な姿で次世代に引き継ぐためには、何よりも森林の整備を適正に行う林業経営体や技術を有する林業従事者の皆様の活躍が重要であるものと存じております。

さて、本年1月に、ニューヨーク・タイムズ誌「2023年に行くべき52ヶ所」において、イギリスのロンドンに次ぐ2番目に盛岡市が選ばれたことをきっかけとして、現在、国内のみならず海外からも旅行者が増加しており、市といたしましても多くの皆様をお迎えする体制を整えております。

皆様には、この機会に盛岡三大麺や地酒など食文化や町並みに触れ、盛岡の魅力を知っていただければ幸いです。また、6月10日には、初夏の風物詩「チャグチャグ馬っこ」が開催されますほか、8月の1日から4日まで先ほどご披露させていただきました「盛岡さんさ踊り」、東北を代表する夏祭りで、特にも太鼓パレードは、世界一のギネスに登録されている太鼓パレードです。

ぜひ、またのお越しを心からお待ちをいたしてお

ります。

結びになりますが、本大会の開催にあたりご尽力をいただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、本大会を通じて全国の林業経営者、林業後継者の皆様がますます発展し、豊かな森林を次世代に継承されていくことを心から祈念し、歓迎の言葉といたします。本日は誠におめでとうございます。

## 来賓祝辞

林野庁長官  
織田 央 様



ご紹介いただきました林野庁長官の織田です。はじめに、先ほど来、話がありましたように、今回の豪雨でいろんな各地で被害が発生しているようですし、山地災害もいくつか出ているという情報が入ってきております。まだ被害の全貌は明らかになっていませんが、被災された方々にお見舞い申し上げますとともに、林野庁として被災県あるいは市町村ともよく連携をさせていただいて、しっかり早期の復旧に取り組んでいきたいと考えているところです。

それでは祝辞を述べさせていただきたいと思いません。

本日ここに、第51回全国林業後継者大会が当地岩手県にて開催されるにあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

はじめに、本大会が「つなげよう豊かな森林を次世代へ」をテーマに、第73回全国植樹祭の関連行事として、全国各地から林業後継者が集い開催されますことに心からお喜びを申し上げます。

また、本日ご列席の皆様方におかれましては、日頃より森林・林業行政の推進に格別のご理解、ご協力をいただくとともに、技術や知識の普及、後継者の育成をはじめとして、我が国の森林・林業の振興に多大なる貢献をいただいていることに対し、心より敬意を表する次第であります。

ここ岩手県におかれましては、林業への就業を希望する若者へ、森林・林業の知識や技術の習得をオール岩手でサポートする取り組みを進めていただいておりますとともに、林業研究グループにおいて森林・林業の魅力を広く発信する活動や特産林産物を活用した取り組みが活発に行われているとお聞きしてお

ります。貴県の活動にあらためて感謝申し上げますとともに、引き続きのご活躍につきましてもご期待しているところです。

さて、我が国の森林・林業を取り巻く状況を見ますと、国内の森林資源が本格的な利用期を迎えているところです。この豊富な森林資源を我々が次世代へ引き継いでいくためにも、伐採後に再生林をしっかりと行き、「伐って・使って・植えて・育てる」という形で循環利用をし、森林の持続性を確保していくことが非常に重要であると考えております。森林の持続性を確保するためには、林業の持続的かつ健全な発展が必要であり、その実現に向け、林業をより魅力のある産業にし、未来の林業を担う後継者を確保・育成していくことが大切です。林野庁といたしましても、林業の収支のプラス転換を図る高い生産性と安全性を確保した新しい林業の実現を目指しますとともに、林業後継者の方々が、より一層ご活躍いただけるよう、環境整備に努めてまいりますので、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、本大会を主催される全国林業研究グループ連絡協議会、岩手県林業研究グループ連絡協議会、岩手県および盛岡市をはじめとする関係者の皆様のご尽力に感謝申し上げますとともに、ご参集の皆様方の益々のご健勝とご発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。



## 来賓祝辞

一般社団法人全国林業改良普及協会  
副会長

佐々木宣和 様



まずもって、昨日の大雨豪雨災害によりまして、被災された皆様に心からお見舞いを申し上げますとともに、早期の復旧をお祈りします。

第73回全国植樹祭の関連行事として第51回全国林業後継者大会が大会テーマが「つなげよう 豊かな森林を次世代へ」のもと、このように盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

大会の開催にあたり、関係者の皆様におかれましては、新型コロナウイルスの影響により大変なご苦労があったと思います。皆様方のご苦労に対して、心から感謝を申し上げますとともに、林業後継者のためにという強い思いで開催に向けてご尽力いただきましたことに深く敬意を表する次第です。

さて、わが国の森林資源は成熟期を迎えており、これを有効利用して林業の活性化や農山村の振興等を図っていくことが期待されています。

一方、近年の気候変動を踏まえた地球温暖化の防止については、わが国でも2050年カーボンニュートラルの実現を掲げ、間伐や主伐後の再造林などにより森林を適切に整備・保全することが重要となっています。

このように、森林は、林業や農山村の振興にとどまらず、地球規模の問題解決にも期待される存在となっており、将来にわたり、この期待に応えるためには、林業後継者となる担い手の確保と人材育成が大きな課題の一つとなっております。

担い手の確保や人材育成は、これまで国と都道府県による林業普及指導事業などを通じて、林業普及指導員の皆様はもちろんのこと、林業研究グループや地域林業のリーダーの方々など多くの関係者が携

わる中で行われてきました。

今後も担い手の確保と人材育成のためには、林業普及に携わる方々の活動がさらに活発になることが大切であると考えています。

本日ここに全国からお集まりの皆様は、地域林業の発展に向けて研鑽を積み活躍されている方々であり、この大会を通じて、次代を担う若者が意欲と希望を持って活躍できる魅力ある林業のあるべき姿を共有の上、引き続き全国各地で後継者育成のためにご尽力いただきますようご期待申し上げます。

結びに、本大会の開催にあたってご苦労いただいた林業研究グループの皆様、そして地元岩手県と盛岡市の皆様に感謝を申し上げますとともに、大会のご成功と本日ご参集の皆様の益々のご健勝を祈念申し上げます。本日は誠にありがとうございます。

# 活動発表

演題

## 「森林の時間感覚をベースにまちを考える」

三田農林株式会社  
岩手林業株式会社 代表取締役社長  
三田林太郎 氏



皆さんこんにちは。もう後継者という歳ではないと思いますが、登壇をお許しください。三田農林は、明治33年、1900年に家業として、岩手林業は大正7年に当時の県知事の要請もあり、民間で森林造成、林業経営をしていこうと、100名以上の株主を得て始まった会社です。



岩手と北海道に約3000ヘクタールを所有し、丸太の生産は年に5000～9000立方メートル、作業は民間や森林組合に外注でお願いしております。

岩手林業では苗木の生産も行い、コンテナに切り替えてきています。森林はスギ、アカマツ、カラマツ、アカエゾマツ、トドマツなどが主で、広葉樹にも軸足を置き始めています。

Jクレジットの販売も10年ほどやっております。会社の事業はリンゴづくりから始まりまして、

梨、アスパラガス、造林が減ってきましたのでブルーベリーの栽培も20年ほど手がけています。昨年からは玉ねぎも開始いたしました。

北海道に開拓で入り、1900年から牧場を経営しております。牛乳・アイスクリームを生産しています。数年前から放牧に切り替え、一昨年末に建て替えをしてカフェも始めました。

これが社員たちの作業の風景です。

不動産賃貸業、元々は貸家・駐車場・アパート経営などでしたが、2005年より会社の山の木で木造賃貸住宅を建設。2009年にはショッピングセンター・クロステラス盛岡を開業しました。

震災やコロナでも1日も休むこともなく（元旦以外）、年に200回のイベントもしております。毎年、横澤さんの木材青壮年協議会さんに小中学生の木工コンクールの作品発表会もしていただいています。





こちらが販促物になり、社員たちが作っております。

2010年からは、所有の築90年以上の古い建物をしっかりリノベーションして、住宅・事務所・店舗・ゲストハウス・ギャラリーなどにお貸しするようになりました。

派生する活動で、所有者が集まる日本林業経営者協会、国の森林総合研究所などの研究機関の審議会の委員として、研究は地道で時間がかかるもの、社会実装や山林振興に寄与するようにと訴えております。

また、まちづくりに関することでは、商工会議所や市内中心部の商店街や、また中心部のデパート・駅ビルなどとの大型店との会議、ここ3年は内丸という盛岡の官庁、金融街の再整備の懇話会の委員、バス路線の見直しや、盛岡に路面電車導入の可能性を探る活動。山村の元気と関係もありますので、県のスキー連盟の役員もやっております。

スライド左上の写真は、造林を始めて55周年、右下が104年目のお祝いの会の写真となっております。この中に5人、両方に出席している社員がいたので今回表紙にしました。

私は10年前から自らを林業経営者ではなく森林所有者と紹介するようになってきました。森林所有



者が政策的にも論調としても、担い手から外されるような状況にあるからです。

一方で、海外で学会などに参加して、研究者や教授に「フォレストオーナーです」と言うと、「よく来たな」と言ってくれます。弊社は森林等との関係においてちょっと特殊な会社なんですけど、なぜ不動産業をやっているかといいますと、火薬やコンクリート、ガラスといった建設資材の商売で財を成し

た創業者は、昭和4年に社員に訓示を行いました。

「商売は戦場に行くほど厳しいが、私はもっと穏健な方法で国家に貢献したい」と。それは林業を指し



たのですが、収入・収益が出なくても続けなければいけないこととして、個人で購入した100軒の住宅を差し出して、会社組織に昭和の最初に農林業の助けとしたことが原点にあります。

諸所に、例えばスギが駄目なときには、アカマツの注文材やカラマツが使われてきました。加工や素材生産といった縦に付加価値をつける展開ではなく、横に事業が広がっていますが、昨今の気候変動や政情不安につけ、小さい複数の事業をささやかにやっているというのは悪くないと思うようになりました。

また、100年の森林の考え方をベースに置くことにより、不動産事業や農業、経理の社員たちも長期的な視点を持っていると思います。

リノベーションは、2016年くらいには地元の仲良くしている工務店の皆様により、どんなボロボロの家も直せるようになってきたんですが、軸足が個別の入居者さんの事情に寄り添ったオーダーメイドの契約に重点が移っています。

最後に、デジタル化が一層進展しますとどの人もリアルな人生の割合は減っていくと思います。だから、街中の緑とそれを取り巻く農地や森林はますます大切だと考えております。以上で発表を終わります。どうもありがとうございました。

## 「地域に根付き魅力を発信していく、地場産業としての森林業 ～釜石地方森林組合の取り組み～」

釜石地方森林組合理事兼参事

高橋幸男 氏



ただいまご紹介いただきました釜石地方森林組合の高橋です。地域に根付き魅力を発信していく地場産業としての森林業を目指した取組ということで、若干ではありますがご説明させていただきます。ちょっとの時間ですけどもお付き合いください。

ここには釜石地方森林組合の概要に記載されておりますが、赤字の部分だけご記憶ください。

震災後、19人の若い人たちが、うちの組織に入ったということが一点。まさに、あともう一つにはその中でも独立して、4人で会社を設立した仲間がいるというのをご記憶していただければ幸いです。

釜石は、多分来た人、来てない人がいると思うんですが、三陸沿岸に位置し、海と魚とラグビーの街で有名です。ただ森林構成を見れば、森林が9割あるというのだけをご記憶いただければ幸いです。

ここからちょっと林業の経緯についてお話させていただきます。これにつきましては、林業白書を分解して管内の林業の費用対効果を計算したものです。50年1ヘクタール、スギを植林した場合、現在価格で補助金を合わせて515万の収入があります。一方、植え付けから主伐まで443万円の費用がかかるというのがデータ上あります。それであれば、林家の方々に、50年で72万ほどの収入ということになるわけです。これが高いのか安いのか、それらを考えていただきたいと思ひますし、森林組合として、ここを解決していかねばならないのではないかなと思ひてます。それらを含めて、当組合

の課題や、林業の課題というのを注視していくと、先ほどお話した所有者の課題、また林業従事者の減少に関わる課題、当然これにつきましては一番考えなくてはならないのは、労働災害の死傷事故が、年の千人率で、全産業に比べて10倍以上あるという話です。それを含めた中で考えていかなきゃならないという思いがあります。3番目に林業という産業、昨今は注目されつつありますけれども、数年前までは学校の教科書からすら外れた時期があったというのだけを現実的に踏まえ、考えるべきと思っています。今まさに自分はそれをどうやって解決したらいいかっていうのを考えているところです。

釜石市の課題です。これはあまりにも大きな課題です。昭和38年当時、釜石には11万2000人いました。震災前は5万7000人です。震災後が4万8000人、今3万人を切ろうとしている現実があるということ、第三者的に踏まえていきたいと思ひます。そのような中で、当組合の取組みで、森林経営管理委託契約が現在全体の5,700ヘクタールを管理させていただいております。これは実際に、当組合員の所有山林のおおむね20%ぐらいです。これらの数字を踏まえて、例えば管内の人工林で、今すぐ間伐できる面積がおおむね6,300ヘクタールというのは推計されますが、それを15年で間伐していけば、年間420ヘクタールの間伐ができるという数字が出てきます。これはあくまでも統計上です。そうすれば、現在の体制プラス43人の雇用が生まれるというのが、

たった釜石管内の40%の森林を管理するだけで計算が立てられるということです。

それを含めて林業が職業として選ばれる土俵につくために何をしていたかなくてはならないかということで、現在、林業担い手確保人材育成事業を行い、小・中・高生に対して、森林の機能並びに森林業に関わる理解醸成をさせていただいています。アンケートがフィードバックされたときに、「森林組合って、木しか伐ってないと思いました」と言われました。「まさか、地質のことだったり、地域の防災のために森林の管理しているんだね」と言われたのはすごく嬉しいことです。

また、大きくは林福連携です。高齢者のひきこもりですが、それを対策するためにいくらかでも外に出て働ける環境ということで、福祉協議会と共同で薪作りをさせていただいています。また昨今、人材不足も含めて管内の建設業と連携もさせていただいています。これにつきましては、管内の地域の経済活動とともに、これが発展していければいいと考えているところです。釜石には日本製鉄北日本製鉄所釜石



地区というバイオマス発電所があります。ここでの売り上げの手数料のうちの半分、おおむね年間1500万ほどの基金を積み立て、冒頭にお話しました森林所有者が負担しなければならない経費に、岩手県森林組合連合会とともに助成金を出して負担金ゼロを目指しているところです。

当組合は、製材機もないですし、製品化する技術は全くありません。それでも、地域材を流通させて製品を販売することにより、地域の製材所が地域の木材で、地域の木工場の人たちとともにコラボして、「ザ・釜石」の製品を売っていかうということで、

いま共同して木材流通協議会を設立し、製品の販売をやらせていただいております。

もう一つのつながりで、都市と農村部をつなぐグリーン社会の構築ということで、現在、北関東、いまは栃木的那須で建設中で、株式会社sanuさんとともに、サブスクのセカンドハウスの事業に取り組みさせていただいています。それがご縁で、来月の7月11日、12日には、ここの社員の方々が来て、自分たちが発生させている二酸化炭素を吸収しようということで、釜石地区の3ヘクタールの再造林と一緒にやるというお話があります。

最後になりますが、釜石地方森林組合の目指す姿として記載させていただいています。若干、本業以外の事しか言っていないませんが、本業を忘れていたわけではありません。当然ながら木材生産並びに資源の活用、経済性も考えなくてはなりません。ただし、それが独りよがりではなく、地域に必要となる「なりわい」になるのが、森林組合として目指す姿だと思います。当然ながら、地道な難しい林業ではありますが、固定概念を捨てて地域とともに一緒にアイデアを出し合って、新たな森林業ができればいいなど個人的には思っています。

取り組みを通じて、そこに関わる職員の方々、並びに林業従事者の人たちは、プライドを持って自分の仕事に取り組んでいただける素地をつくりたいと思っています。森林組合並びに林業だけでは多分地域を維持することはできません。当然ながら、いろいろな人たちとパートナーシップを組んで、より良い環境をつくりながら、次世代に森林をつなげるというのが、我々が与えられた使命なのでしょう。その中で、パートナーシップを組み合わせながら、アイデアを出しながら、仕組みとして働き方の多様性や独立性を認めるという組織ができれば、後継者が入りやすい組織になるのではないかなと考えるところです。

それが冒頭にお話しました、地域に根付き、魅力を発信していく地場産業としての森林業になりえるゆえんだと思います。簡単ではありますが、活動発表に代えさせていただきます。ありがとうございました。



演題

## 「林業の担い手の確保・育成に向けて」

横澤林業株式会社 専務取締役  
横澤孝志 氏



ただいまご紹介にあずかりました、横澤林業株式会社の横澤孝志と申します。

本日はこの全国林業後継者大会という大きな舞台で、活動発表する機会をいただき光栄に思います。不慣れな部分があるかと思いますが、本日はよろしくお願いいたします。

それでは、「林業の担い手の確保・育成に向けて」と題しまして、自社の取り組みや業界の仲間と連携して行っている活動について発表いたします。

まず簡単に自己紹介させていただくと、平成9年、家業である横澤林業に従事し、平成19年法人化に伴い、横澤林業株式会社専務取締役に就任いたしました。当社の会社情報についてはこちらの通りです。昭和54年に創業。事業内容は、民有林を中心に、

「伐ったら植える」をモットーに、地域の持続的な森林経営を目指すことを経営理念に掲げており、具体的な経営方針は、「伐ったら植える」「施業の集約化」、「若手林業技術者の確保・育成」の三つです。

今回は後継者大会ということですので、「若手林業技術者の確保・育成」に関する内容についてご紹介いたします。

当社は平成27年当時、従業員9名中5名が65歳以上と大ベテランが多く、若手の確保は急務でした。

そこで、岩手県林業労働力対策基金に相談し、主催する就業ガイダンスなどに参加し、平成29年に高卒2名を採用。平成30年には「いわて林業アカデミー」1期生2名が入社しました。

このことにより、ずっと若返りが進みました。この写真が、その4名で写真を撮ると笑顔でピースしてくれる素敵な社員たちです。入社後は技術意識の定着向上のため、フォレストワーカー研修への参加、岩手県伐木技術指導員に講師を委託し、伐採技術を勉強。定期的なリスクアセスメント講習などによる安全意識の定着などに取り組んでいます。

また、社員が安全・安心に作業できる環境作りが重要と考えております。防護ズボン、安全靴の支給、義務化はもちろんですが、下刈り作業時に一番危険性の高い蜂刺されと熱中症対策として、平成29年に防蜂空調服と、防振防蜂手袋を導入いたしました。着用していれば蜂に刺されないという安心感から作業効率も上がり、熱中症対策としてサマータイ

・地域の子供達を対象とした木工体験、森林教室  
(大学生、地元家具屋とコラボ)



伐採から造林・育林まで自社で一貫して作業を行っております。

当社は山主さんからの信頼を得ながら、「伐った

ムを導入することで下刈作業の負担軽減対策を行っております。

そして、次世代の林業の担い手確保に向けた取り組みも行っております。これは地域の中学校、高等学校の研修の受け入れの様子です。下刈り、植え付け、機械操作等の体験を通じて、林業に興味を持ってもらえるよう継続して取り組んでおります。

また、地域の子供たちを対象とした木工体験、森林教室を行いました。これは大学生が企画し、地元の家具屋さんとともに講師として参加させていただきました。森林環境税が決定し、町から森林所有者の意向調査が行われたという時期もあり、子供たちよりも保護者から山に対する質問が多かったのが印象的でした。

これまで自社内の取り組みをご紹介しましたが、担い手の確保・育成という大きな課題に取り組むには、自社だけではなく同じ思いを持っている同世代の仲間と協力し、業界全体で取り組んでいくことが重要だと思います。そのため、業界の青年層の団体に入り、定期的に情報交換を行い、交流を深めております。

その中で、令和元年に設立したノースジャパン素材流通協同組合青年部会ではひよんなことから初代会長を現在まで務めております。

最後に、この青年部会の活動を紹介いたしたいと思っております。

当青年部会は、現在会員40名で活動しており、大きな特徴として、岩手県内にとどまらず、北海道、東北各県の境をまたいで会員が所属していることが挙げられます。そのため、一つの団体内でいろいろな地域の人とつながることができております。

中央の写真は設立総会の写真ですが、活動するときに、一番気を使ってるのが、みんなで楽しく活動するということです。活動内容は、会員自ら発案する研修勉強会、海岸防災林再生活動等への社会貢献活動、そして、今一番力を入れているのが森林・林業の普及啓発活動です。

活動の目玉としているのが、青年部会で主催しているこども向けの普及啓発イベント「げんき森林(もり)モリフェスティバル」です。いわての森林づくり県民税を活用したイベントで令和3年度から開催しております。そして、今年の8月6日に第3回の

開催が決定しています。イベントでは、林業関係団体や林業機械メーカー等に会場利用、運営、スタッフ参加、機械およびブース出展等にご協力いただきたい



でおります。

また、昨年7月に開催した第2回は、「全国植樹祭」1年前祈念イベントと併催し、多くの方にご来場いただきました。

岩手県伐木指導員によるチェーンソー伐倒と、ハーベスタでの伐倒、玉切りのデモンストレーション。体験コーナーでは、実際のチェーンソーを使用した丸太切り、ハーベスタシュミレーター、木工教室、木登り体験など、林業の仕事を見て、体験し、木材に触れ、実自然を楽しむ、そんな構成になっております。我々青年部会スタッフもこどもたちと一緒に楽しみながら実施しているイベントです。パネル展示コーナーに、このイベントのチラシもありますので、ご覧いただくと幸いです。

駆け足となりましたが、私からの発表は以上です。本日も後継者大会ということで、若手の方々にたくさんご来場いただいております。いろいろな課題がありますが、皆で協力しながら明るく楽しく取り組んでいきましょう。ご清聴ありがとうございました。

演題

## 「世界スタンダードの林業を目指して」

株式会社柴田産業 代表取締役  
柴田君也 氏



皆さんこんにちは。柴田産業の代表取締役・柴田君也と申します。よろしくお願いいたします。

それでは今回、第51回全国林業後継者大会の事例発表ということで、当社で取り組んでいる世界スタンダードの林業を目指してどのようなことをやっているか、どのような地域づくりをやっているかという観点から説明させていただきたいと思います。

まずは当社の特徴ですが、当社は植林、伐採、運送、製材加工、木質燃料を作って販売。最近では建築もやっています。自社で、植える、育てる、伐る、建てる、用材・製材に向かない部分は木質燃料を作り、発電所に木質燃料として送っているところです。そこから出来た再生可能エネルギーを当社工場でもた回して、100%循環型というコンセプトで経営している会社となります。今、経営計画も取り組



んでおり、社有林で約500ヘクタールの経営計画を立てております。J-クレジット等も来春からスタートするという予定で今動いております。

当社が力を入れて取り組んでいることが二つあ

り、一つは世界スタンダードの林業。私たちが見ている林業というのは、私が大学生の頃、実家に帰ってくると、その頃にはハーベスタが動いていました。今から30年前です。今の高性能林業機械の機械化とあまり変わらないというのが見えておりました。私はヨーロッパの林業もいろいろ勉強して、そちらと肩を並べるような日本の林業に全国各地域でなっていければいいなという思いのもと、今、私の会社が、林業の実験施設みたいな形になっており、それを楽しくやっております。ローカルSDGsの実現では、やはり資源を地域で回せるような、エネルギーを木質から使いたいということを地域で実現するための取り組みにも注力しております。

CTLシステムですが、作業システム自体は2人で完結。1人がハイランダーという伐倒機で伐倒して、グレモで搬出する、これはヨーロッパでスタンダードな方法となっております。私たちは、最新の技術の習得に注目しており、レーザードローンでの解析に取り組んでいます。あと何か新しい技術が入った場合にはメーカーさんや大学の先生、地域の同業者の方々や、社員みんな勉強会をしています。

林業のイメージアップをしたいという強い気持ちがあり、当社はモンベルと提携し、林業用のバックやパンツ、いろんなものの開発もお手伝いさせていただいております。今は、地拵えの機械化をしようと、デモデータを作り、将来的には地拵えの自動化という目標を立てながら取り組んでおります。また、地域の資源をどうやったら地域で使えるか、地域にお金を残せるか、公共建築物促進法など出てき



ている中で、岩手県も木造の建物がたくさん建っています。県外の企業が来て、県外の大工さんたちが建てて、結局、納期に間に合わないから外材を使う、という物件が結構あると思います。誰でもフリーで使える工法が欲しいと、当社で木造のプラモデルのように建てられるシステムを開発しました。その工法で建てた当社の加工倉庫は今年デザイン賞をいただきました。特徴としまして、畜舎とか倉庫など現場ですぐ建てられるようにと、工場内で全部加工して納めています。

ローカル SDGs の実現のためにやっていることは、「鳥コキッズステーション」という学童、日曜日にはおむすび屋さんをやったり、ワークショップをやったりという民営の公民館のような働きをする店舗を運営しております。何で運営しているかという、木材屋の当社としては、この地域と森の接点をどうやってつくれるかが興味があり、「木に興味はあるんだけどどこに行ったらいいかわからない」、「山を持っているんだけどどうしていいかわかんない」という一般の方の相談窓口をつくりたいという思いで運営しております。おかげさまで今年ウッドデザイン賞をいただいた建物になっております。

それで私たち林業サイドから、林業をもっと伸ばしていくために、これからどうしていけばいいかといういろいろ考え、地域連携と、木材業界だけでなく、畜産、観光、伝統工芸、教育を含めて、みんなと一緒に地域でいろいろな活動を取り組んでいくことが異業種間でお互いの課題解消の近道になり、それがさらに新たな仕事になる。私たちだけではなく各分野の人たちに相乗効果で出てくるので、この取り組みに注力しております。そのワークショップですが、通常、製材所・林業はこういう職種の違う人たちが集まることは少ないので、まずはこういうところから林業に興味を深めてもらうというような取り組みが主軸になっています。そこからの派生形でローカル SDGs 体験パークという当社の近くの廃校を利用して、林野庁の地域エコシステムの事業を一戸町で3年間やっております。また地域の熱利用の施設に対する木質燃料の安定供給をできるシステムをつくらなければ熱利用は広がっていかないだろうということで、今年、このバイオマスセンターの建設を企画しております。

当町では、「御所野縄文遺跡」という世界遺産が

ありますが、過疎化の進んだ町で泊まる場所もご飯を食べるところもないという状況なので、必ず寄ってもらえるようなワーケーション施設などを建て、そこで熱利用・電気利用するというのを私たち1社でやるのではなく、地域全体で取り組むところまで広がってきました。



木材業界の担い手の確保に向けて、働きたいと思われたい会社を自分たちがつくらなければいけないと常に思っています。そのためには、楽しさとやりがいと安心、この3つではないかと考えて制度を作ってきました。先ほどの取り組みですが、木材業界だけで発展しようというのは難しいのではないかなと思ったり、地域であったり、山林所有者さんであったり、エンドユーザーであったり、大学や行政、企業であったりと、みんなとのつながりが今後必要になってくると考えております。重要だと思うのは森のファンの育成です。やはりこの発信が木材業界で一番欠けているなと思うところです。一般市民の人たちも共感はしてくれると思うので、我々は発信を頑張って、共に進める仲間をどんどん増やしていきたいと考えて取り組んでおります。

これで、当社の取り組み発表を終わらせていただきます。日本各地それぞれの事情は大きく違いはありますが、まずは現時点から一歩先に踏み出せるような林業を作っていきたいと考えております。私からの発表は以上です。ありがとうございました。

演題

## 「はじめの一步」いわて林業アカデミーの人材育成

岩手県林業技術センター首席専門研究員  
小澤洋一 氏

有限会社フォレストサービス  
則竹彩絵 氏



小澤：皆さんこんにちは。いわて林業アカデミーの小澤と申します。本日はよろしくお願いいたします。

則竹：有限会社フォレストサービスの則竹彩絵です。本日は短い時間ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

小澤：私どものアカデミーに入講する若い人たちは、はじめてチェーンソーを触る、はじめて機械に触れるという形ですので、そういった若い人たちが1年間どんな研修しているのか、全てはご紹介できませんが、主な内容についてこれからご紹介したいと思います。

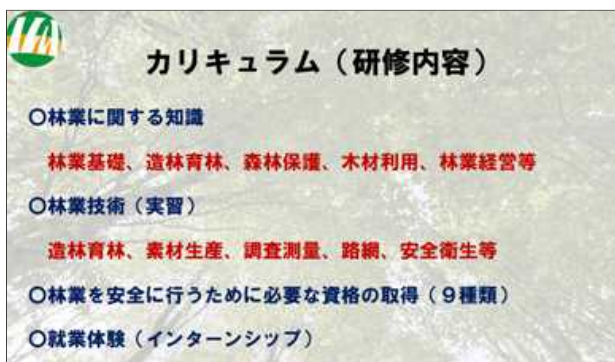
いわて林業アカデミーですが、平成29年に開講しています。令和5年度で第7期となります。これまでに96名が修了しています。目的として、林業に興味のある若者に研修機会を提供して、意欲ある人材を林業界に確保したいということと、将来、林業経

名の研修生でスタートしています。

カリキュラム、研修内容について簡単にご紹介したいと思います。林業に関する知識、林業の基礎ということで、例えば地図の見方、基本的な単位の知識を勉強します。さらに、造林・育林、あとは、松くい虫、ナラ枯れといった森林保護、木材利用、林業経営等について、主にこれは座学になりますが勉強しています。あとは林業技術、ほとんど実習になりますが、実習として、造林育林、素材生産、調査測量、森林作業道等の路網、安全衛生等について学びます。そして林業を安全に行うために必要なチェーンソーや、林業の機械を操作するための9つの資格を1年間で取得します。アカデミーでは、インターンシップとして、年に3回、7月に3日間、10月に10日間、12月に10日間、様々な林業事業体、森林組合等の協力を得ながら実施しています。

研修の中身について、その特色をご紹介したいと思います。オール岩手で研修・就業サポートと、ありますが、アカデミーでサポートチームを結成しており、21の林業関係団体あとは企業にご協力いただいで研修を運営しています。後で若干ご紹介したいと思います。

それと、各分野のプロフェッショナルの方、実際に林業の現場で働いている優れた技術者の皆様を外部講師としてお招きし、研修を運営しています。36科目中20科目で支援をいただいています。また、東北森林管理局様、盛岡森林管理署様、森林総合研究所東北支所様と、林業普及指導員、こういった形の支援を得ながら1年間の研修を運営しています。



営体の中核となる技術者を産学官の連携によって育成したいということで設置しています。盛岡市の南隣の矢巾町の林業技術センターの中に設置しています。研修期間は1年間で定員は15名、本年度も15

サポートチームの皆様からの支援によって運営している研修になります。例えば、左上の写真は、チェーンソーメーカーのエンジニアの方、世界大会WLCという大会がありますが、そちらの方の技術スタッフをされた方など、そういうプロの方にチェーンソーのメンテナンスや、基本的な操作について教わっています。上段の真ん中は、岩手県治山林道協会様の支援を受けて測量について研修します。また、素材生産の現場で、こちらの方は、簡易架線集材の特別教育ですが、こちらをサポートチームのイワフジ様から支援をいただいて実施。あとは、林業機械のメンテナンスについて、これもサポートチームの方からご支援をいただいております。こちらの写真は、林業の刃物の基本的なこと学んでいますが、このようにサポートチームの皆様から多大な支援を受けながら、質の高い研修を実施できていると思っています。

今ご紹介したサポートチームについては、こちらに掲示してある21団体、企業様となります。ここからは、1年間当アカデミーの研修を実際に経験した3期生の則竹さんからお話をいただきたいと思います。

**則竹：**いわて林業アカデミーの特色をご紹介します。いわて林業アカデミーでは、岩手県林業技術センターに設置されており、教室や機械、倉庫など基本設備の他、プロセッサやハーベスタなど11台の林業機械が整備され、重機専用コースで研修することができます。さらに、約100ヘクタールの試験林を保有し、間伐や作業道づくりの実習を行っており、充実した設備とフィールドの中で研修を受講することができます。また、研修時間の8割が実習となっていて、チェーンソーや高性能林業機械の技能の習熟に重点を置いているのが大きな特色です。

次に、主な実習についてご紹介します。チェーンソー技術に関しては、サポートチームのチェーンソーメーカーや販売店から基礎構造やメンテナンスを詳しく教えていただく他、県内のプロの技術者の皆さんから、基礎的な知識・技術の指導を受けています。受け口や追い口を作る練習では、水平や角度、つるのサイズなど、1回1回計測し、適正な範囲に収まるように反復練習を行っています。9月には、アカデミーで伐木競技会を開催しています。ソーチェーンの着脱、丸太の合わせ切り、模擬伐倒の3種目で競います。大会に向けた練習を通じ、技術レベルは格段に上がります。これらの練習を踏まえ、秋以降の間伐

実習や素材生産総合実習が行われます。

間伐実習は、林業技術センターの試験林で10日間ほどに渡って行われます。3班にわかれ、測量と選木の後、生産間伐を行います。各班には外部講師がつき、伐倒や造材、林業機械の操作など丁寧な指導を受けます。2月に行われる素材生産総合実習では、



毎木調査の結果をもとに収益をシミュレーションします。これまでに学んだ知識と、技術を駆使する1年間の総仕上げとなりますが、技術や知識だけでなく最も重要な安全な作業と行動が身に付いているかを繰り返し確認していきます。入講した1年前に比べれば、チェーンソーや林業機械の操作、森林や林業に関する知識は格段に向上していることに気づきます。このように同じ志を持つ仲間と出会い、あっという間に1年間の研修を終え、就職後もお互いに支え合い、林業の仕事、林業の現場に入っていきます。**小澤：**最後に課題と今後の取り組みということで、2点ほど。

一つは知識と技術の習熟度の向上。一言で言いますと、研修の質の向上です。こちらを毎年毎年改善していければと思っています。二つ目は、林業という職業と、アカデミーの周知、皆さんに知ってもらうということです。中学生や高校生の皆さんに、林業を職業の選択肢として認知していただきたいと思っています。その上で、林業という誇り高い仕事、難しい仕事の重要性や研修の意義を知っていただければと思います。このようにいわて林業アカデミーははじめの一歩ですが、はじめの一歩の次は明日に一歩ということで、1年間の研修を終えた修了生が次のステージで輝けるように、今後も皆さんと協力しながら尽力していきたいと思っています。発表は以上です。ありがとうございました。



# パネルディスカッション

## コーディネーター

国立大学法人岩手大学農学部 教授  
**山本信次** 氏



東京農業大学大学院修了。博士(林学) 岩手大学農学部助手・准教授を経て現在同教授。森林管理に関わる市民参加研究とともに都市住民に対する森林・林業についての普及啓発活動を展開している。森林保全市民団体の全国ネットワークNPO法人「森づくりフォーラム」理事、東京都世田谷区と群馬県川場村の交流および里山保全事業「里山塾」塾長、地産地消の家造り活動団体「イーハトーヴの森と家づくりフォーラム」の代表などを務める。

## パネリスト

三田農林株式会社  
岩手林業株式会社 代表取締役社長  
**三田林太郎** 氏



盛岡市出身。社有林を岩手県・北海道に所有。音楽・アート・スポーツの趣味をもち「森林と街をつなぐ」をテーマに多様な活動を行う。林業に留まらず不動産事業(住宅・店舗・フルリノベーション)でも地元経済の大きな役割を担う。平成12年から県産材・自社材を積極的に不動産物件に活用し需要拡大を図る。平成21年盛岡市中心街に商業施設「クロステラス」を開業。林業と不動産を融合させ居心地の良い街づくりを推進している。

## パネリスト

株式会社柴田産業 代表取締役  
**柴田君也** 氏



二戸郡一戸町出身。令和2年代表取締役役に就任。「岩手の山を元気にする木材屋」をキャッチフレーズに、植林、伐採、製材・加工等、川上から川下まで自社で行う。次世代型の林業機械を活用した低コスト素材生産を実現。アウトドアカーと林業ウエアーの共同開発を行い、林業のイメージアップを図るとともに、仕事を通じて広がったつながりを軸に、地域社会へのローカルSDGs浸透を目指し、森林資源の循環利用を通じた持続可能な地域づくりに取り組む。

## パネリスト

釜石地方森林組合理事兼参事  
**高橋幸男** 氏



下閉伊郡山田町出身。高校卒業と同時に森林組合に入組。平成20年参事に就任し、林野庁が推進する「提案型施業集約化事業」の全国12のモデル組合のひとつとして、集約化施業を実践したほか、森林の経済的・環境的資産価値の向上を目指し、J-ver(二酸化炭素排出権クレジットの取引)などを推進。東日本大震災からの復興に取り組む中、英国の金融機関の支援を受け、「パークレイズ林業スクール」を開講し、人材育成に尽力。地域の森林資源を活用した「森林業」の再生の基礎づくりを目指す。

## パネリスト

岩手県林業技術センター首席専門研究員  
**小澤洋一** 氏



岩手県職員として、令和元年度から「いわて林業アカデミー」の運営を担当し、運営スタッフとともに、次世代の人材育成に携わる。運営をサポートする企業・団体の協力の下、林業の基礎知識と安全作業の技術を研修生一人一人が確実に習得できるよう日々奮闘している。

## パネリスト

横澤林業株式会社 専務取締役  
**横澤孝志** 氏



岩手郡岩手町出身。高校卒業後とともに、家業(横澤林業)に従事。平成19年の法人化に伴い横澤林業(株)専務取締役に就任。「伐ったら植える」をモットーに、伐採から植林、育林までを自社で一貫して行い、森林所有者とともに、持続的な森林経営の実現に取り組む。青年部会は、後継者の資質向上などを図ることを目的に、令和元年に設立し、初代会長に就任。会員自らの発案による各種研修を通して、森林・林業の普及啓発や関係団体との交流活動を行っている。

## パネリスト

有限会社フォレストサービス  
**則竹彩絵** 氏



盛岡市出身。盛岡農業高校環境科学科卒業、在学中に(公財)岩手県林業労働対策基金主催の就業支援講習で林業機械の魅力に惹かれ進路を決める。いわて林業アカデミーで初の女性受講生として、支援講習の実習先である同社に就職。「基本を大切に」をモットーに、4年目となる現在は植林、下刈の造林業務、チェーンソー伐倒、重機作業など生産業務、工程管理業務の全般に従事。先人から受け継いだ森林資源を次の時代に繋げたいと技術の研鑽を日々行う。

# 「次代を担う若者が意欲と希望をもって活躍できる魅力ある林業の確立に向けて」

**山本氏** 岩手大学の山本と申します。今回、林業後継者大会のパネルディスカッションのコーディネーターを依頼されたときにいろいろと考えましたのは、林業後継者って何だろうということでした。以前、学生が、「先生、私、林業に就きたいんです」って言われたとき、ふと思ったのは、



山本信次氏

「森林を取得して森林所有者になって経営をしたいのか？それとも森林を管理する作業をするための技術を身につけて現場

で働きたいのか？それとも森林の経営を行いたいのか？あるいは、それ全体を包括する行政を含めたような形で森林管理の全体を担うようなフォレスターになりたいのか？」ということでした。農業は最近だいぶ変わってはきていますが、日本は、基本的には自作農主義でやってきましたので、農業をすることは農地を持って農業をするという割とわかりやすいわけです。林業をすることは、森林を所有する、森林で作業をする、その作業をするための事業体を経営する、あるいはその全体の計画を作るといったようないろんな人たちが関わっているわけです。

いみじくも今日御登壇いただいた皆さんは、比較的大規模所有者で、森林の経営を1人で完結されている方、中小の所有者を束ねて管理を請け負っている森林組合、あるいは、他の人の森林を管理するために能力を持った技術者集団の事業体の形といっ

たように、林業の後継者には色々な種類があり、まさにそういう多様な人々が主体となり協力して行うからこそ、林業は工夫の余地があり大変面白い産業だと思っています。今日はそういった意味で色々な形で林業に関わり、形づくっている皆さんに、それぞれの立場から色々な問題について、「私の立場からこう見える」というお話をさせていただきながら、会場にもいろんな立場で林業に関わっている方がおられると思いますので、御自身の参考に、あるいは違う立場の人からはこう見えるのか、といったような参考になる議論を進め、できる限り多くの視点から、新しい林業の可能性というものを掘り下げていければと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、最初の御挨拶にもありましたが、林業は生業ですので、綺麗事を言ってもというお話があります。どうやって林業で収益を生むのかを考えていくと、やはり一つは木材生産という林業のメインの部分での生産性の向上という議論は絶対に外せないところかと思います。この生産性の向上の話についても大きくは二つに分けられ、一つは個人が現場で伐倒・搬出をされる方の技能向上の部分。それを含めて人の育成やコーディネートするような組織として生産性を向上していくという二つの観点があると思います。

まずは、特に個人の技能向上、新しく入ってきた人たちをどうやって安全に生産性の高い林業技術者として育成していくのかといったところについて、少しお話を聞いてみたいと思っています。これは森林組合の高橋さんに、あの震災以降、多くの方を雇用され、現場で作業する仲間として、また独立した事業体として育てた御経験から、このあたりどのような工夫をされておられるのでしょうか。



**高橋氏** 生産性向上について技術的な部分で言えば、当組合には伐木造材の講師であるグループ長がいます。新規参入者の新しい職員はその者と一緒に、まずは「的確に正確にできる」を目標にして、それが身につくまで次のステップへいくよう、時間をかけることが一番重要なことだと思いますし、各種研修会等に確実に派遣することも重要だと思います。同じレベルの人たちとコミュニケーションを取ることが重要な部分であると思いますので、そういうのを的確にやっつけていかなければと考えています。

**山本氏** なるほど。同じ立場の人が話し合うのに、複数の人で研修を受けることが大事ということなんですね。同じ質問で横澤さんはいかがでしょう。

**横澤氏** 私も高橋さんと同じで、各種研修会への参加はもちろんのこと、現場内で先に教えることは、先の作業についての段取りです。弊社は一貫して作業を行っているので、一つ一つの作業が次につながるため、伐採から造林・下刈まで、段取りや仕事の内容から先に教えて、そこから技術を補強していくような形で指導しています。

**山本氏** 体を使って動かす労働というのは何か日本では割と低く見られた時代があり、黙って体を動かしたらいいんだろうという感じがあったかと思いますが、今の横澤さんの話はそういうことではなくて、その先まで見越して、きちっと自分がやるべき内容を理解した上で、そこに体を動かす技能を身につけるといのが大事だということでしょうかね。

**横澤氏** 頭を使うというより体で慣れるということ、無理して疲れるまでやるというわけでもなく、まずは仕事の中身を覚えて、どこで手を抜いたらいいか、そういう理解をしていければいいと思っています。

**山本氏** 私も大学の演習林の教育もしており、演習林では、現場の方が直接作業されているので、何度か一緒に作業したときに、「非常に疲れた顔している。下手だからだ」とよく言われました。わかっていて体が動かせる、力を抜くところと入れるところ

がきちんとわかるということがやはりとても大事なのかなと感じますね。柴田さんいかがでしょうか。

**柴田氏** 当社は新人に対しては、生産性というのは全く求めていません。今はフォレストワーカーの制度を使わせていただいて、まず実習と座学、例えば理論的な部分、あとは当社の現場で実際の仕事としての部分をきちっと覚えてもらいます。とにかく事故のない安全な仕事ができる体制をつくる。そのためには物と人をとにかく大事にする。あとは会社がどういう方向でどういう思いでこの先、伐採であったり植林であったりを進めていくかという理念的な部分を教え込むところが、スタートになっています。

**山本氏** 生産性向上については、次に組織的にどう対応しているかというところで改めて皆さんからお話を聞きたいのですが、今お三方に共通しておられたのは、新しい方が入ったときには安全第一ということと、仕事の段取りや中身をきちんと理解してもらおうということが、おそらく安全性と先の実産性向上の両方につながってくるということなんだろうと思います。小澤さんは、アカデミーでお話されるときはそのあたりはどんな形で意識されてますでしょうか。

**小澤氏** アカデミーを支援していただいている講師の先生の言葉ですが、「生産性の大前提は安全な作業、安全な技術である。速さは自然とついてくる。確実に基本を繰り返し練習することで作業のスピードは後からついてくる」ということをアカデミーでは伝えていきます。そこから先の現場での戦術とか作業の戦略は、また次のステージになると思いますが、研修の中でも次の工程の人が楽になるように、1年を通していろんな研修の中で伝えているのが実態です。

**山本氏** 高橋さんの報告の中でもありましたが、かつてに比べれば格段に、例えば安全装備とかいろんな形で安全に対する意識は高まってきていると思うんです。それでも残念ながら、今でも国内でトップクラスの危険な仕事であり続けるのが林業作業の現場であるというところを考えれば、今日岩手のトップランナーで林業をやっている皆さんが安全のこと

を一番に考えながらやっているというのは、本当に安全の知識を普及していくことが大事だなと考えております。則竹さん、実際にアカデミーで習った部分あるいは現場に出られてからのところで、いかがお考えでしょうか。

**則竹氏** アカデミーで安全性など学んではいますが、実際現場に出るとやはり違ってきます。技術面に対してもう少し向上して、研修などもっと充実させて自分の力にしていきたいなと思っています。

**山本氏** こういう現場の作業は、OJT的にやっている、あるいは先輩と、縦の組織の中で習う部分が多いと思うのですが、今の則竹さんのお話であれば、そこだけだと、どうしても限界があるので、もう少し他の人と一緒にやったり、新しい情報が入ってくるような研修の機会があるといいなという感じでしょうか。

**則竹氏** そうですね。ワーカー研修でいろんな人の技術を学んではいるんですが、やっぱりそういう機会は大事で、交流も大事だと思うので、もっと増えたらいいなと思います。

**山本氏** フォレストワーカー研修やフォレストリーダー研修など、体系的に現場の作業を習う機会は大変増えてはいると思いますが、もう少し充実させていく方向は大事かなと思います。もう一つ、今、則竹さんが言われたところで大事だなと思うのは、横のつながりが研修に行くことができるという部分。やはり、リーダー研修、ワーカー研修に行って、同じような立場で悩んだり考えたりしている人と出会える場があるとありがたいよね、という話もある。安全面もそうですし、精神的な安定も含めて、そういう研修の機会は個人の技術を深掘りしていくようなとても大事な機会かなと感じております。三田さんのところは、こういった問題はどんなふうにお考えでしょうか。

**三田氏** 以前、山本先生が「山をデザインしていくことは、ドイツでは高等教育を受けたフォレスターしかできないんだけど、日本では一介の作業員でも経験や教養があればできる」と仰って、私もそれは

日本の職場の大変良い点だと思います。私たちの立場にとって、生産性というと森林が豊かだということをもっと示していくと思うんです。弊社では、スギについては80年から100年の木を枝打ちなどでコントロールすることで120年に伸ばしています。経済的には短伐期への動きがあり、私もブラジルなど



で、我々の100年のマツと同じ成長を5年で遂げるようなものを見てきていますが、やはり基本は長伐期だと思うんです。仲間の研究者はフィールドワークを通して高齢級の木の成長はそれなりに維持されるし、むしろ生物

多様性や公益的機能は100年を超えて高まっていくので、我々の視点はむしろ数百年を見ていかなければいけないのかなと最近思っています。自然の力を借りて、土壌を豊かにして、また最近是他産業の方から広葉樹が欲しいとか、色々使いたいという話をピンポイントでもらっていますので、こういったスギやカラマツのようなまとまった資源じゃなく、広葉樹のようなもののボリュームを把握するというのも、生産性の向上につながっていくのかなと思っています。

**山本氏** 前半のところは以前三田さんと一緒にドイツに行ったときにお話をしていたんですが、ドイツは、いわゆるフォレストワーカーの養成とフォレスターの養成というのは全く別個に行われています。フォレストワーカーが勉強してフォレスターになっていくという道が全くないわけではないんですが、普通はそれ専門の学校に行った人がその仕事をするという、ある意味、資格と仕事ははっきりわかれているのがヨーロッパの特徴です。ただ日本の場合、普通の会社もそうなんですが、社員がだんだん偉くなって、経営者になることを考えると、各地の森林組合でも、外部から入った方が最初は作業員でも、非常に経験が豊かなので森林組合の運営側に回っ



て、最後には地域の森林をデザインする人になっていくという形もあります。そうすると現場に入ってきた方のキャリア形成は、逆に実は日本は多様で、どんどん技能を身につけて生産性を高く安全に仕事ができる技術者になることもできるし、組織を作って運営をしていく、先ほどの高橋さんからお話がありました。独立して事業体を起こすやり方もあるでしょう。あるいは今日お話があった横澤さんや柴田さんのように経営計画を作成して、地域の森林経営までする形もあり得るわけで、日本ではそういった意味で新規で入ってきた人たちに可能性が開かれているという言い方もできると思うんです。今までそれは偶然起きていたことでしたが、新しく入ってきてくれる人たちに対して、それをいかに計画的にこういう道もありますよ、と提示していければ新しい人が入ってきてやすい業界になっていくのかなと思っております。もう一点、長伐期とか混交林の話については、おそらく短伐期よりも高い技能が必要になってきますので、森づくりのあり方をどう考えるかにより必要とされる技能も変わってくるわけで、いろんな森がこれから必要になってくるとすれば、今三田さんが言われたような山づくりのあり方も一つの可能性として示される。伐倒技術の高い労働現場で労働される方も間違いなく必要になってくるのかなと思っておりました。事業体としていかに生産性を上げ、良い森づくりをしていくのかということについての工夫を今度はお聞きしたいのですが、柴田さんが機械を導入されながら新しいことを色々やられているので、先ほどの紹介にプラスアルファで加えていただければと思います。

**柴田氏** 生産性を上げるということですが、考え方が何個かあると思います。単純に高性能機械に変えて生産性を上げることがまず一つ。あと作業の工程というか準備です。例えば、当社は伐る前にレーザードローンで全部計測してデータから道路や作業の計画を立て、それをもとにして作業員が迷うことなくスタートする。何でそれをやっているかということ、やはり若い班長さんと年配の班長さんで何が違うかということ、機械の操作は若い班長さんの方が上手ですが、実際現場に入ったときの道路の付け方とか、作業の順番とか、その辺の経験値で非常に大きな差が出ている。そこを埋めるのにデジタルの力を

借りてできればいい。それを取り入れながらまず機械化を組み合わせることによって、より大きな効果が出ると思います、取り組んでいます。

**山本氏** 今のお話、特に経験を技術で代替しながら、もちろん最後の最後には経験でしかわからない部分は残るとは思いますし、経験に置き換えられる部分をつくっていくというのはとても大事なお話だと思うんです。具体的にはどういうことが置き換えやすい部分でしょうか。

**柴田氏** 一番簡単なのは、先ほど言ったように例えば、レーザードローンのデータから道路を通す線をパソコンで自動的に設計して、それをもとに現場で作業道の開設をする。その作業道の線形が決まったところで今度は作業の伐採場所の順番を指定、伐採から再造林まで考えたシステムづくりをとということです。

**山本氏** 例えば、そういうことをやるときに、技術の精度として、どのレベルを求めるのかで変わってくるとは思います、そのあたりいかがですか。

**柴田氏** 例えば、ヘクタール200万の調査費がかかるとなれば木より高くなるわけです。確かに95%、98%の精度のデータは出てくるかもしれない。ただ私たちが求めるのはヘクタール2万円だったり5万円であったり、という安価なコストで8割以上のデータが出てくれば、それでもう十分だと考えていますので、そこまで精密なデータを取ろうということは考えてないです。かえって仕事ベースはそれでいいと考えています。

**山本氏** この辺は実は研究仲間ともよく話していて、もちろん研究レベルとしてはできる限り、ドローンあるいは衛星画像から、どのぐらい精度の高



柴田君也氏



いものを作れるかという研究は必要だとは思いますが、とても高くつくんです。今日お話を聞いてちょっとほっとしたのは、現場レベルで求められる低コストで8割ぐらいの精度の技術といったものがあると、ある程度その現場の人の感覚というのを変えていけるのかなと。これは本当に現場をベテランの作業している方と歩いて「この辺このぐらい間伐しなきゃね」という数字は後で全部精密に測ったものとほとんど変わらなかったりするので、そういった現実の技術を落とし込んでいくかというあたりは大事だと思います。今の話とは別に、横澤さんのところは植伐一体をやられながら生産性の向上を図られている話が先ほどの報告の中にもありました。そのあたりもう少し詳しく教えていただけますでしょうか。

**横澤氏** 先ほど柴田さんがおっしゃっていたんですが、私の現場では一番大事なものだと思っています。

それは皆伐時に再生林の事も考えた路網設計をしています。例えば、皆伐に使った作業路でそのまま地ごしらえができるか、その道路がそのまま下刈、植え付けのときに使えるか、単純なことですがそういったところでの低コスト化を考えてやっています。

**山本氏** 今工夫されているような道路を開設することや職場と一体でやられている中身で、季節的な寒暖部分はどんなふうに対応されていますか。

**横澤氏** 基本的に伐採するのは冬ですので、私の地域は雪が降ります。なので、秋植えは基本的に考えておりません。まず冬に伐って、春に地拵えをして、そのまま植えるという段取りでやっております。

**山本氏** そういう意味では、チームでできる仕事の中身を見ながら伐採面積を考えて、その後の地拵えや造林の全体像が合うようにしていると思うんですが。新しい人を加えたときに、改めて少しずつ施業する面積が大きくなっていくようなイメージでしょうか。

**横澤氏** はい。

**山本氏** 先ほど柴田さんのお話にもありましたが、林業はとても地域性が高く、地域ごとの林業事業者の腕の見せ所というところだと思います。ある意味それがあるからこそ、地域に根ざした形の作業が必要になってくると思います。この辺りは高橋さんが言われていた地域に根ざした森林業ということかと思うんですが、それを踏まえて森林組合での生産性向上の取り組みは如何でしょうか。

**高橋氏** 生産性の向上につきましては、本当に柴田さん、横澤さんが言っているように個別だと思います。現実問題、林業は、森林所有者の土地を借りる部分があり、ものすごく難しい部分があります。所有権が発生するので、そこをいかに作業する人たちが入りやすくまとめるかが大きなポイントです。それがまとまらないと、路網整備に計画性が出ないと思います。個別に生産性の技術が向上するのは一つのパターンですが、組織として生産性をどう上げるかというのは、森林の作業計画をある程度まとめて、より良い無駄がない作業方法を議論するという形が重要だと思います。組合の特徴を話すと、ご存知の通り釜石は、リアス式海岸ですごく地質が入り組んで、一つ裏の峰に行ってしまうと付加体の土が溜まり、流出する部分があります。そういう部分で、地形を見て良い道路であっても、地質を見てダメな道路が結構ある。最近の大雨災害で、それらを誘発するような作業計画は難しい部分が多々あるので、当然ながら、生産性の向上を目指すための職員同士の共有というのはあるべきだと思いますが、それだけではなく、地域に災害をもたらさない健全な森林づくりというのが根底にないと、生産性の部分まで追求していけないと最近思い始めています。

**山本氏** 道路についても、例えばパソコンを使いながらの設計は、現場で、「こういう道が提案されたけど崩れそうだから駄目だね」という判断ができてはじめて使えるのだと思います。コンピューター通りに全部やればいなら何の苦労もないわけですが、柴田さん、そういったあたりの配慮はされている感じでしょうか。

**柴田氏** 高橋さんが言っていた通り、木を伐る地域の人たち、一番は地域の人たちとの共存といいますか、そこの人たちの道路に対する要望もあります。それによって、我々が思い描いている効率的なところを変えなければならない部分も多々出てきます。林業というものは、地域の人たちとともに動いていかななくてはならないので、効率が悪くなるときでも、所有者や地域の人たちの意見を聞くようにして、大雨が降っても迷惑のかからないように一番気をつけています。

**山本氏** 効率性はもちろん日本中で林業をやる時に大事ですが、それぞれの地域の事情、その地域の人との人間関係、そういったコミュニケーションの中で実現されるものだと思うんです。だから、先ほど柴田さんがいみじくも言われた、機械を入れれば生産性が上がる、これはどこでも同じことができることなんですが、そこにプラスアルファで、現実に作る道は地域とのコミュニケーション、あるいは、その土質の問題、雨の降り方で変わってくるのでしょうか。林業というものがその地域と切り離せない産業であると、それが生産性の向上でも外せない大事なポイントではないかと改めて思いました。

それでは次に、話題を変えさせていただいて、今いわゆる王道的な木材生産の話を中心に議論してきましたが、今日の事例紹介の中で興味深いと思ったのは、林業が単なる木材生産の産業ではなくなってきたというのが多くの皆さんの事例発表の中にあっただと思います。多くの異業種の方たちと連携しながら新しい価値を生み出していくものとして、林業がうまく使われているようにとても感じます。そのあたり、今新しい取り組みをされている事例について、もう少し深掘りしていきたいと思います。まず、三田さんは歴史的にも林業と新しい業種を組み合わせながら新しい価値を生むというあたり、いかがお考えでしょうか。

**三田氏** 先ほど事例紹介した通りですが、どんなボロボロの家でも結構リノベーションはできています。ただ不動産については契約が長いので、最初は木の建物を作って人間関係を作っていくと思っていましたが、どうやら逆で、人間関係を作って、それを木の建物を使って維持していくということが出て

くると思います。創業者は、岩手医大を作った弟、原敬、新渡戸稲造とかそういう人たちとともに農林業と衛生が都市の基盤をなすという考えを持っていました。それは同郷の後藤新平も含めて、岩手から台湾の近代の国づくりにも活かされていきました。そういう形で森林がベースにいろんなものに派生していくと思っています。

**山本氏** 実は、三田さんが古い貸家を地元の木、あるいは自分のところの木でリフォームして貸すという事業を始められたとき、私もたまたま地域の仲間と地元の木で家を作ろうという会をやっており、三田さんのところを見せていただきました。そこは北上川と岩手山が見えるとてもいい貸家で、何件かあったのですが、「この貸家を全部潰してマンションを建てたらとても岩手山の展望が良い家が建ちますよね」という失礼な話をしまして。そのとき三田さんのお答えが「土地を所有するということが、あるいは土地を活用していくということは一時的にはそちらの方が儲かるのかもしれないけれども、やはりその場所に責任を持つことだと思います。だからこの場所がきちんと未来にわたって、盛岡という街の良い景色をつくって、そして岩手山が見える景観が維持されて、そこに長く住んでくれる人がいて、というのを目指したい」と言われてですね。世の中に立派な方がいるもんだと今でも覚えています。そういう中で街づくりと林業が連携していくことは、単に木を使いましたということではなく、盛岡というまちをどうデザインしていくのか、そこでどんな人たちがどんな暮らしをするのかということも含めて本当は考えていかなければいけないと思うんです。もちろん、例えば東京のような大都市では、人の入れ替わりも激しく、そこまで考えられないところとはたくさんあると思うんです。今日は何度も紹介されましたが、外から見て良い街だと思ってもらえる街であり続けるためには、もう少し丁寧な、配慮した街づくり、木の使い方、その中での人々の暮らし方といったものまで気を配っていくというのが結果的に木材を使うことの価値を高めていくのではないかなと感じました。併せて、先ほど地域産業ということでしたが、釜石地方森林組合の場合はイギリスのパークレーとか、異業種とも連携しているいろいろやられていますが、異業種連携のあたり



をエネルギーの生産も含めてお話いただければと思いますが。

**高橋氏** このつながりのきっかけは東日本大震災だと思えます。たくさんの方々に釜石に来ていただき、森林組合にも来てくださったというのが第一のきっかけです。その中では、お互いに自分たちが考えられることを協議することにより、林業だけでは成り立たない、林業だけでは考えつかないことを色々教えられたというのが最初であり、それから継続してつながっているというのが実際の話です。最初に考えたのは、丸太を生産する立場である森林組合は、製材所が元気になるかと駄目です。当然、合板工場とか収める場所が元気になるかと、丸太は売れない。そこから建設屋と一緒にいくんですが、そういう流れの中で森林組合という丸太生産者が、販売の方にお手伝いできないかっていう論法です。いろいろ勉強したとき、エンドユーザーという異業種の方々の考え方は林業とちょっと違って。山を持っている人達や、木を持っている人達は、木でなければならぬという論法になってくるんです。買う人は、「木材を使ったメリットって何？」という考え方です。そのエンドユーザーの考え方を長い時間をかけて教えていただいたのが第一です。その中でより良い方法を議論していただいて、こういうのができると教えられながら、今現在、その人たちを満足させる製品、製品から商品に変わって今お付き合いしているのが現状です。それがたまたま波及効果で、1社が2社に、2社が3社にという形で継続しているというのが今の異業種連携になります。エネルギー政策に関して言えば、やはり元々日本製鉄さんが、石炭火力発電所で、当時の原油価格が上がって、このままだと原油石炭だと難しいんじゃないかという時代があり、その時に地域の邪魔者である林地残材をどうにか燃料にできないかという話がありました。ただ、当時、林地残材がお金になるということは到底こちらは考えてなく、残材を出すことによって赤字になるんじゃないかという話をしたんですが、せっかく日本製鉄さんがやってみないかと言ったからには、試す価値があるのではないかということで当社が試したというのが実態です。だからその転換で今まで短材のみを搬出していたのを、搬出の経費を削減することで、出

てきた材料はある意味では経費がかかってないという形になるので、そうすればプラスになるということです。そういう

中で、お互いが持っているスキルをぶつけ合ってお互いが議論し合っ向上していくのが一番の異業種間の連携だと思えます。それから、自分は40年林業をやっています。林業の頭で、どうしてもこれ無理だよねっていうときがあるんですが、「でも待てよ」と。よその人から考えてみれば、「そういうのってこういうことで簡単だよ」と言われることがあるんです。そういう関係性が今やっと築けてきたというのは、多分、こちらも積極的にオープンにしているということなんです。オープンにすることで相手も話しやすいですし、互いに関係性を築けてきたかなと思います。



高橋幸男氏

**山本氏** バイオマス発電も釜石の場合は新日鉄製鉄があったこともあり、今でいう電力の固定価格買取制度の前から準備されてきたことなので、本当に長い間の信頼関係があるのだと思うんです。もう一つは、何がいいことなのかを提案ができるということがとても大事。というのは、今までの林業関係者は、割と口が重くて、寡黙で、特に東北はそういう感じだったと思うんです。自分たちが社会的にどんな意味を持っているのかということをしちんと言葉にして説明できてなかったような気がします。そういったことは釜石では震災がきっかけになって、色々な方が来てコミュニケーションをとる中で、自分たちのこれをやることの意味や価値というものを、ちゃんと提案して相手に納得させるというプロセスが生まれてきたんだと思うんです。地域の中だけではなく、他者との間にきちんとコミュニケーションを取っていく、そのことが新しい価値を生んでいるという感じがします。では、柴田さん、まさに地域SDGsの話などそういうところかなと思いま



すが、どんなふうに意識してやっておられるでしょうか。

**柴田氏** 私たちは個人企業ですから、例えば日本全体の需要をどうのこうのとか、そんなの全然手の届く範囲の話ではないんです。しかし、それを小さくして自分の町とか小さな単位で見れば、私たちが動くことによって、木材の出口をつくることができるのではないかなと。やはり出口をつくるためには、街づくりがくっついてきて、それができることによって、人もお金も資源エネルギーも、地域で回っていくように活動したいというのが念頭にあります。そのためには、やはり他の業者とも協力し合っ取り組んでいくことが、みんなも伸びるし、私たちがそれに引っ張ってもらえるし、まさにさっき高橋さんが言っていた話になると思うんです。林業というものは結構今人気あると思うんです。一般市民の方からも、みんなから見て、すごくいいことを山の中で我々日常的にやっているんです。山の中だと一般の人たちの目につきにくいというので、どうかして一般市民の方々からも我々の取り組みを知っていただく森のファンを増やすというような活動につなげていきたいなと思いで、植林体験とか、そういうのもいろいろやるようにしております。

**山本氏** 林業だけではなく1次産業へのイメージが明らかに変わってきていると思います。先日、東京駅の八重洲口に行って、東京駅の目の前に赤いトラクターが展示されていたときはびっくりしました。外国人の観光客の方が嬉しそうに写真を撮っていて、一昔前、ふた昔前の場合、農業用トラクターが東京駅の前にあるってちょっと信じがたいと思うんです。でも、それがむしろ当たり前にかっこいいというふうにみんなが思う時代。林業については、まさにCO<sub>2</sub>の吸収も含めて自然を管理する仕事として非常にイメージが上がってきています。これは時代的には間違いなく追い風で、それをどう使うかということは間違いなくあると思います。その一方で、先ほど柴田さんが言われたことで大事なと思うのは、CO<sub>2</sub>の問題とか世界の環境問題に最終的にはつながるんですが、そのためにお前は何%の仕事をするのとか言われても多分実感がなくて、そうではなく、先ほどの三田さんの話とも関わってくるんだと

思いますが、この町で、いいこと面白いことをやっていく。そのためには、自分単独ではできないから関係する人たちと、自分たちの暮らしを良いものにしていく。それが結果的に世界全体にとっても良いことですよ、というような順番なんだろうと思うんです。

さて、ここまで異業種間の連携の話をしてきましたが、先ほどの横澤さんの話ではむしろ同業の人たちが県域を越えて連携することが非常にためになると話がありました。そのメリットについてもう少し深く教えていただけますでしょうか。

**横澤氏** 私は同じ青年層組織として、岩手県木材青壮年協議会という組織と、ノースジャパン素材流通協同組合青年部会という組織に所属しています。その他にグリーンマイスター連絡協議会にも所属していま



横澤孝志氏

す。岩手木青協としては川上から川下までの後継者層が集まった団体です。そこでは川上から川下への情報、ノースジャパン素流協としては素材生産業者としての情報、グリーンマイスター連絡協議会としては現場の技術面をメインとした情報と、全てにおいて情報共有ができていくことになります。一番メリットがあるのが横のつながりというような関係性です。なのでとても聞きやすく、教えやすく、問題解決しやすいのかなと思っております。

**山本氏** 変な話ですが商売敵なわけで、秘密にしまっただけ高い技術を持って儲けてしまえということもないわけじゃないと思うんですが、そんな人間は林業業界にはいないんでしょうか。

**横澤氏** そこも不思議なところで、同業ですけどライバルとかそういう考えはなく、柴田さんも隣町ですし、同じ地域で活動していて色々教えてもらっている仲です。やはり横の関係って感じですか

ね。

**山本氏** この話は、江戸時代ぐらいの農業技術の伝播もそんなところがあって、同業種の中で連携しながら、お互いに高め合っていこうという意識が非常に高くてですね。本当にそういった意味では内部での連携というのはこれからますます強まっていき、切磋琢磨しながら良くなる形にどんどんなっていくんだと思います。その上でさらに異業種連携がまさに縦横が合わさった形で林業、あるいは森林が持つ価値を社会に向けて発信していく、あるいはそのことが単なる木材産業ではない新しい林業のあり方みたいな新しい価値を生み出していくのではないかなと感じております。

さて、もう一つのところで言ったように、林業は本当に社会的にも注目されていますし、かつてと違って単に木を伐ってくる人、というようなことではない新しい価値を持つものだということが社会に対してアピールできる時代になってきていると思うんですが、そういったことをアピールしながら新しい人材を林業業界の中にこれから呼び込んでいかなければいけないと思います。そういうことをやるためにも、社会に対する働きかけの話が今日の事例発表の中にもたくさんあったので、そのあたりを教えてくださいなと思います。これは柴田さんからお願ひします。

**柴田氏** 一番に思うのは、私たちが林業を楽しむこと、そこが一番重要じゃないかなと考えています。自分が快適に働きたいし、安全に働きたいし、楽しく働きたいと思うので、うちの会社に来てくれる人たちが同じ思いで働いてほしい。そのために林業の実験室みたいなうちの会社で、とにかく新しい技術を発見して試していく。それもすごく楽しいですし、あと見た目もやっぱりカッコよくないかね。イメージよくおしゃれにしていきたいというのもあるので、作業着でも「あそこの会社に入ってあの服着たいな」と思われるような「あそこの会社で働きたいな」という幻想をどうやってつくるかというのに注力してます。

**山本氏** そのあたり横澤さんいかがでしょうか。

**横澤氏** 若い人材は確かにすごく入ってきていると

思います。あとは、どう継続していくかというのも課題になっており、モチベーションを高く保てるように、我々事業体が、いかに魅力ある職場にしていこうかというのが課題となっています。うちの会社に入ってきたきっかけが、どこまで魅力として続くのかなというのが思うところでもあります。林業にはたくさんの魅力があって、仕事をすればするほど魅力は増えていくと思うんです。それをどう導いていくか。そういうことが私たちに求められているのかなと思っています。

**山本氏** 釜石地方森林組合の高橋さん、いかがですか。

**高橋氏** 今、柴田さんと横澤さんが言ったのは本当に全てではないかなと思います。ただ付け加えるとすれば、釜石の場合では、低年層・中高生が林業という職場を選ばない、選ばない、そういう環境にあるということです。身近ではないという話です。それでもっと底辺層に広げて、こういう山を守ってる人がいるんだよ、というのをお伝えすることで少しでも興味を持っていただくということが必要と思っています。

**山本氏** 若い方をいわゆる現場の技術者として迎え入れる話を、小澤さんと則竹さんに聞いてみたいんですけど。小澤さんいかがですか。

**小澤氏** 私5年間アカデミーに携わっていますが、林業が職業として若い人たちの視野の中に入ってきてないというのがすごく逆に感じます。今日も7期生が全員来ていますが、彼らが林業を選んだきっかけと



小澤洋一氏

というのは、例えば中学校の時に釜石地方森林組合の職場体験で伐採を見たとか、親類の中に林業関係者がいて、その現場に携わったとか、何かのきっかけ



があるんです。そういうものがもう少し、小さな取り組みを一つ一つ重ねていければ、というような気がします。

**山本氏** 則竹さんいかがでしょうか。御自身が入講したときのことも含めてどんな感じだったんですか。

**則竹氏** 私が入るときは、ちょっと自分の勝手なイメージだったんですが、力仕事で体力がないとついていけない仕事だとずっと思っていました。その中でアカデミーに入って、出会うきっかけをもらって、自分の成長がすごく見れるのが魅力的なので、そういうのを自分から発信したりしていきたいなと思っています。



**山本氏** 最近、若い人と話していて思うのは、自分を成長させてくれる仕事、そうじゃないと就きたくないという思いが強かったり、書類仕事をするのはもちろん大事なことで、それが悪いというわけではないんですが、そういう仕事のあり方に対して飽き足らない人たちが、自分の体を使いながら体と頭を両方使いながら自分を向上させていく仕事をしたいと、その一つの選択肢が林業になっているんだろうという感じがします。もう一点、これは今からもう20年ぐらい前になるんですが、岩手の県北で林業労働する人たちをどうやって確保するかというシンポジウムを西日本の人も集めてやったことがありました。そのとき面白かったのは、西日本はもう20年前の段階でIターンで人が入ってきて仕事をしていました。今から20年前ですから1990年代の終わりから2000年代の頭ぐらいだと、まだ岩手県はかつて出稼ぎをしていた。西日本の場合は過疎というのが拳家離村でどんどん人がいなくなってしまって村に本当に人がいない。だからIターンで来る人が仕事をするという形になっていて。岩手の場合は出稼ぎ

型だったので子供はいたんです。最近は地元で仕事ができるので一家で暮らせるようになって、林業労働する人を探す際に、「でもいやうちの息子がいるから」とか、「地元の農業高校から雇えば」という形だったのが、この10年ぐらいでしょうか。どこもIターンをすごく求めるようになり、東北も地元で若い人が少なくなってきている状態になってきた。まだ県を越えてくるといふ人はそんなにいないと思うんです。盛岡とか近隣の町から林業の労働に来るといふような形に変わってきていて、おそらく遠くから、東北も外から若い人たちがどんどん迎え入れていかないと林業をやってくれる人を確保できない時代がもう目前まで来ていると思います。だからこそ裾野をどう広げていくのかというような時代になってきてるんだと思うんです。この質問の話は横澤さんのところでも、子どもたちの林業体験とかやられてる、そのあたりいかがですか。

**横澤氏** やはり先ほどから皆さんが言われている通り、林業に入ろうと思うきっかけというのが大事になってくると思います。そのため我々青年部として、そのきっかけをどうつくるか、それをテーマに考えたときに普及啓発イベントを行いました。イベントの内容を考えたときも、見て、体験するというのを中心に考えました。

**山本氏** 本当に林業の一番最先端で頑張られている方が、そういうことをやってくれる時代になったんだなと思って。昔は森林体験だったんです。でも林業をやっている方がちゃんとその裾野を広げる話をしてくださるようになって、時代が変わってきてるなと思います。柴田さんも先ほどのアンテナショップじゃないですけど、いかがですか。

**柴田氏** 今年、新入社員が4名入って、そのうちの2名が小学校や中学校のときに職業体験に来たことがある子です。そこからアカデミーに進んで、当社に就職してもらいました。やはり幼少期の体験というのはすごく大きいというのを改めて感じています。植林体験も継続していますし、あとは何か小さい木工品を作るようなワークショップも続けています。幼少期のときから木に触る、木材業、製材所や、山の伐採で、小さいときから現場を見せる機会をどう



やって企画を提供していき続けられるかというところが今後注力していかなければならないのではないかなと感じています。

**山本氏** 本当に林業の現場で忙しくされている皆さんがやることに意味があるというふうに感じますか。

**柴田氏** 結構ハードルが高く、植林体験がそうなんですけど、今までは自社の伐採現場に連れていく方法で行っていたんですが、もっと色々人を呼びたいとなると、大型バスが現地のすぐ横につくところがいい、雨が降っても何とかなるところがいい、車を停めたところから山奥までは行けないよとか、色々制限がついてきます。それで今年から一戸町と提携して、一戸町有林の一部を、いつでも植えられる状態にして、県外・県内の小学生の体験学習をする場をつくらうということで一歩先に進めたかなと考えています。

**山本氏** 違う主体と連携しながら、足りないところを補いながらやるっていうのがいいのかもしれないね。自治体とか色々なところと協力しながら、より効率的に色々な人に見てもらえる機会をつくれるといいのかなという感じがします。高橋さんはいかがですか。

**高橋氏** おかげさまで色々やらせていただけていますが、一つには森林環境譲与税の関係で釜石市から人材育成費をいただけてるのが一つです。ただやはり若干、先ほど柴田さんたちがおっしゃっていたみたいに、実際の林業現場で体験させたいんですが、安全性とか考えた場合、どうしても連れて行けない場所が出てきますのす。そのときには座学、あと事務所の前が木材センターになっています。そこで木工もしくはノコギリの使い方を仮体験みたいな形で対応しているのが実態です。

**山本氏** そういう意味では必ずしも林業現場でなくても体験する機会をつくれるということだと思えます。三田さんのところは自社ビルに、舞台を作ってくださいたり、街中に地元の木が使われた建物をたくさん作って見えるようにしていただけてますけ

ど、一般の方たちに地元の木を見せていくというあたりは意識されてますか？

**三田氏** そうですね。木をライフスタイルの中に取り入れてもらいたい、ということは非常に思っています。それについて説明をきちんとしていくことも大事です。説明しないとわかっていただけません。若い人を惹きつけていくということなんですが、私たちはあまり明るい話はできなくて、長期の時間だったり、地域を俯瞰して、今後の社会や地域がこのようになっていくのではないかとこのところを誠実に示すことが、若い人たちの賛同や使命感につながっていくことを信じてやるしかないのかなと思っています。リノベーションは、これからもう人口がどんどん減っていきますので、縮小の社会の中で森林を維持していくということは、これは町と森林とどちらもなんですが、世界で最も困難なチャレンジだと思っています。まだ合意もとれてないですし、造成された住宅地の一部を森林に戻すようなことも我々はやっていかなければいけないのかなと思っています。所有者というのは山を放り出すことができないですし、起きてることを受け止めていかなければいけないし、さっき横澤さんがおっしゃったように継続の努力というのが求められるんです。地域、会社の歴史をきちんと整理をして、今いる現役の人たちだけではなく、もう亡くなっている方とも一緒に仕事をしている、という感覚を持って仕事をしていくことが意思決定のレベルを哲学的に高めることができるのではないのかと思います。そういうところが魅力ある職場を作れると思っています。今、特に産業界が木材を欲しがっています。特に若い人たち、新たに入ってくる人たちというのは、山で生産性を上げるためのロボットでもないですし、クリエイティブに生きていきたいという方が多いと思います。さっき職人という話も出ましたが、簡単にたどり着くことのできない世界というのもすごく若い人たちには魅力が出てくるのかなと思っています。

**山本氏** そうですね。その辺の深みというかですね。多分何段階もあって、ぱっと見て「すげえカッコいい」これももちろん大事だし、「コミュニケーションをとって深く」、それはすごいなというのがわかる。おそらく何段階にもわたる理解をしていた

だく機会をつくっていくことがとても大事で、もちろん街中に建物があって木造でかっこいいな、なぜそれが使われることに意味があるのか、あるいはその山でどう育ってきたのかみたいな深みもあるでしょう。作業で働く人の話も同じで、かっこいい服を着てかっこいい仕事をしている人から始まって、そこには技の深みがある。入口のかっこよさから、初めて深いところまで伝えていくということが、人を引きつける上では大事という気がします。私も今日思ったんですが、コミュニケーションということが深く感じるようになってきました。小澤さんは若い方をずっと受け入れてこられて、そのあたり感想で結構ですので、どんな感じでしょうか。

**小澤氏** 林業は、すごく大きい規模の育てる仕事ではないですか。木1本1本が大きいし、それが集まると森林であるし、それ自体は地域の環境でもある。そこに自分たちが関わっていく、さらに生産する上では、自分たちの技量次第で利益になる、そういうところにきっと魅力があり、若い人たちが感じているのかなとすごく思います。なので、その辺もアカデミーの研修で勉強するモチベーションになっているようですので、それはその通りだと思います。

**山本氏** 時代は変わってきたというふうに強く思うところがあり、林業という仕事自体が1980年バブルの頃は3Kで駄目で、非常にネガティブに語りながら人に来てもらおうという、矛盾したことをずっとやっていました。今はとてもポジティブに森林や林業と関わることを感じてくれる社会もあり、あるいは現場の方もかっこいいと信じてながらやる方が増えてきて、それがいい形で今相乗効果ができていると思うんです。それをこの後、いかに継続していくのか、先ほど横澤さんが言われましたが、その思いだけでは続かないわけで、それもきちんと生業として成り立たせていくのかとかですね。しかも全体としては縮小基調の社会の中で、どう工夫しながらそれを続けていくことが、これからの課題というふうにも思っております。

さて、時間がなくなってきましたので、最後に皆さんから今日の話の中であった自分にとって魅力ある林業って何だろうということについて、お1人30秒というところで最後に言い残したことを語って

ただければと思います。これは則竹さんからお願いできますでしょうか。

**則竹氏** 先ほども言いましたが、自分の努力した分の成長が見えるところと、出会った仲間だったり、同じ会社の方々と切磋琢磨できるところが魅力だと思っています。

**小澤氏** 今の7期生が修了すると、アカデミーの卒業生が100人を超えます。あとはフォレストワーカーで勉強している人たちがどんどん増えていくことで、少しずつ未来が変わって、また違う世界になってくるのかなと楽しみに思っています。

**柴田氏** 林業は伐るところだけではなく、植えるところ、苗を作るところ、それから生産するところ、建てるところと、他の縦軸も色々な種類がありますし、それに加えて、横のつながりも深く広いものがあるので、その辺をもっと追求していかなければと思います。木や森というものは、私たちの生活に絶対なくてはならないものだと思います。これからも林業にこうやって携わっていただけるということを誇りに感じながら、林業を楽しんでいきたいと考えております。

**横澤氏** 森林から森林へと、次の世代につなげられるように若い世代とともに森をつくっていきたいと思います。

**高橋氏** 林業って奥がまだまだいっぱいあり、自分は40年関わってきたんですが、知らない部分が多々あります。その中でも、自分の考えをある程度独りよがりではなく、地域が考えた中でデザインできるというのは、林業のすごい仕事としての魅力だと思います。

**三田氏** 最近、産業界は木材をすごく必要としています。また儲けだけで山を所有していこうという方も残念ながら結構いらっしゃいます。その中で、私たちは、地方において森林を中心に、自然のキャパシティと産業のバランスと都市のサイズをシビアに捉えて、訴えていかなければいけないのかなと思っています。森林は絶対必要で、長くそれを以って守





り抜くってということが我々には必要で、それは若い人たち、今横に一緒に並んでいる皆様とともに、よく打ち合わせをしてやっていければなと思っています。

**山本氏** 最後に本当に一言だけ、今日の最初のご挨拶にもありましたが、岩手県というのは本当に森林の多い県です。そこに豊かな森があって、今日もお話をお聞きして、それを支えてくださる人材もこれだけいます。今日のテーマ「つなげよう豊かな森林を次世代へと」ですが、森が豊かということは、多分、森だけで成り立っていることではなく、そこで暮らしている人、それを生業にしている人たちと合わせて豊かな森というのだらうと思います。

岩手県の森のあり方は、確実に良い方に向かっていくと私は最近信じられるようになってまいりました。この傾向を変えないよう、今日のこの集いも含めて、森を使いながら、森は動かすことができませんので、森とともに私たちは暮らしながら、豊かな地域や社会をつくっていければ良いのではないかな

と思っています。

世界で2番目に来る価値のある県ですから、豊かな森をつくりながら皆で楽しく生きていければなと思っています。

大変拙い進行で申し訳ありませんでしたけれども、パネリストの皆さんのおかげで面白い議論ができたかなと思っています。誠にありがとうございました。それではこれでシンポジウムを終了させていただきます。どうもありがとうございました。



# 閉会式典

## 大会宣言

本日、私たちは盛岡市に集い、「つなげよう 豊かな森林を 次世代へ」をテーマに意見を交わし、今日に携る若い世代が率先して、「森林・林業の重要性などを発信し、豊かな森林を継承していくこと」を確認しました。

先人たちが守り、育てた健全で豊かな森林は、木材の生産のほか、水源のかん養、災害の防止、さらに、地球温暖化の防止など、私たちの生活に多くの恩恵を与えてくれる大切な財産です。

この大切な財産を守るため、「伐って、使って、植えて、育てる」という森林資源の循環利用を進めながら、森林を適切に整備・保全し、次世代にしっかり引き継いでいくことが私たちの役割です。

この大会を契機として、私たちは、これからも森林・林業の魅力を発信し、林業に誇りをもち、この豊かな森を次世代に繋いでいく取組を一層進めていくことを宣言します。

令和5年6月3日

第51回全国林業後継者大会 いわて2023



いわて林業アカデミー修了生

山中崇義 さん

松倉彩歩 さん

## 次期開催県あいさつ

第52回全国林業後継者大会  
岡山県実行委員会 会長  
三木敬臣 氏



ただいまご紹介いただきました、第52回全国林業後継者大会岡山県実行委員会会長の三木でございます。岡山県を代表して一言御挨拶を申し上げます。

この度は、岩手県での全国林業後継者大会の開催に当たり、準備・運営にご尽力いただきました関係者の皆様に心より敬意と感謝申し上げます。

東日本大震災で甚大な被害を受けられてから、林業者の皆様、地域、行政等関係各所の皆様が力を合わせ復興の道を着実に歩まれ、また、希望を持って林業を次の世代へと引き継ぐべく取り組んでおられることに、改めて敬服いたします。

さて、来年度の全国林業後継者大会は52回目となりますが、岡山県での開催ははじめてでございます。

岡山県は、北部に中国山地の山々が連なり、中部には広大な吉備高原、さらに南部が温暖で雨の少ない平野や瀬戸内海があり、県土の約7割が森林です。

変化に富んだ気候、地形などの自然的な条件によ

り、アカマツ、ブナ、コナラといった天然林など様々な樹木が育ち、県北部は主要な林業地としてスギ・ヒノキの人工林が多く、とりわけヒノキの丸太生産量は全国トップクラスになっております。

森林が雨を蓄え、その水が川を下り、海へ注ぐ。この大きなつながりを支える林業の振興と、森づくりの重要について意見を交わし、林業に携わる人たちが希望と誇りを持って働き続けられる、新たな林業の魅力を全国に発信していきたいと考えております。

会場は、歴史と自然豊かな岡山県津山市です。関係者一同、皆様のお越しをお待ちしております。コロナ禍も収束の方向に進んでいます。

大会が、林業に関わる方々や、新たに林業や森林に関心を持つ方々の交流の場となることを祈念し、簡単ではございますが、次期開催県の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

## 閉会の言葉

第51回全国林業後継者大会  
岩手県実行委員会副会長  
盛岡市農林部長  
北田雅浩 氏



皆様、長時間にわたり大変お疲れ様でした。

一つお知らせをさせていただきたいと思えます。盛岡駅東口から西口の方に向け旭橋を渡ったところに、材木町というところがあります。名前の通り江戸時代から材木の流通船を使っの材木の流通で栄えたところでございます。今も北上川と石垣という

ふうな組み合わせでその名残がありますし、今日は毎週恒例の「材木町よ市」というイベントもやっておりますので、ぜひお立ち寄りいただければと思います。それでは、以上をもちまして、「第51回全国林業後継者大会いわて2023」を終了いたします。本日は大変ありがとうございました。



## 大会の様子



大会会場入り口



大会看板



大会会場入り口



館内



受付



ぎのこラスクの販売



展示



客席



## 配布物紹介



【当日配布物】大会プログラム、トートバッグ、大会記念品

### [大会記念品] 組木細工と裂き織りのコースター

一つは黄綬褒章を受賞した名工が手掛けた、「アカマツ」、「スギ」、「ナラ」の3種類を組み合わせ制作した組子細工のコースター。もう一つは、使い古した布を捨てずに新たな生地の一部にする、江戸時代中期に東北地方で広がった裂き織りの技術を生かしたコースターで、盛岡さんさ踊りの浴衣を使用しています。「盛岡らしさ」を感じることができる2つのコースターです。

## 館内展示・販売コーナー紹介



盛岡広域森林組合青年部



一関地方森林組合室根婦人部はなみずきの会



展示

### 販売・展示団体一覧

#### ■販売

盛岡広域森林組合青年部、一関地方森林組合室根婦人部はなみずきの会

#### ■展示

ノースジャパン素材流通協同組合青年部、岩手県森林組合青年部連絡協議会、岩手県森林整備協同組合育成部会、いわて林業アカデミー、林野庁東北森林管理局盛岡森林管理署、盛岡広域森林組合青年部、一関地方森林組合室根婦人部はなみずきの会



## 大会運営

### 第51回全国林業後継者大会岩手県実行委員会

## 構成団体

岩手県林業研究グループ連絡協議会、岩手県森林組合青年部連絡協議会、  
岩手県森林整備協同組合育成部会、岩手県林業経営者協会、  
ノースジャパン素材流通協同組合青年部会、岩手県木材青壮年協議会、  
公益財団法人岩手県林業労働対策基金、岩手県グリーンマイスター連絡協議会、  
盛岡広域森林組合青年部、盛岡市、岩手県

## 事務局

第51回全国林業後継者大会岩手県実行委員会事務局

(岩手県林業技術センター)

〒028-3623 岩手県紫波郡矢巾町 大字煙山第3地割 560番地 11  
TEL. 019-697-1536

(岩手県農林水産部森林整備課)

〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10番1号  
TEL. 019-629-5785